

<本日のメニュー> なごやかに楽しく、どうぞよろしく！ kakumi@i.softbank.jp

- 1 「困っていること」の共有：先生たちが困っていること 子供たちが困っていること
- 2 通常学級の先生方をお願いしたいこと：病気の子供を「ひとりぼっち」にさせない工夫
- 3 「言葉」を変える：べてる理念から学ぶ
- 4 グループワーク：青森県病弱教育 前向き○○ を作成します。

1 「困っていること」の共有：今、青森県内の院内学級の先生たちが困っていること

2 通常学級の先生方をお願いしたいこと：「ひとりぼっち」にさせない工夫

・入院している子供たちに対して、どうしたらいいの？

検索キーワード： 知ってほしい病気の子どもたちのこと

https://edupedia.jp/article/54a7e07e522efe00008af5da?km_saf_try_cnt=1

・自宅療養している子供たちに対して、どうしたらいいの？

・通学している病気の子供たちに対して、どうしたらいいの？

_____は必要だけど _____はいらない。

高価な薬より

よみうり教育メール コラム「情報教育最前線」2001年夏

このコラムを読んでおられる「あなた」は「先生」ですか？もしそうでないとしても、仮に「先生」になったとして考えてみて下さい。

自分が担任している子ども（生徒）が、病気になって入院してしまいました。2，3日ならまあいいとして、親御さんから「どうも1ヶ月以上入院しなければならないようです」と連絡が入りました。「そんなに重い病気なのかしら」 当然その間、学校は欠席です。さて、あなたはどのような対応をしますか？

東京都立光明養護学校「そよ風分教室」は、東京都世田谷区にある国立小児病院の中に設置された「病院内学級」です。あなたの教え子はこの国立小児病院に入院したとします。

「先生、入院先の病院に院内学級があるんです。主治医から入院が長くなりそうなので院内学級への転入をすすめられました。転校手続きをしたいんですが...」「えっ？院内学級？そんなのがあるんですか？」っと、「先生」である「あなた」はその存在すら知らないかもしれません。

翌日、転校手続きに必要な在学証明書などを取りに来たお母さんと面談します。子どもの病気が決して軽いものではないことを知らされ、とても心配になります。それに、転校してしまうと、教え子が急に遠くに行ってしまうような気になります。

お母さんは、教育相談を受けた時にわたされた「分教室案内」を持参していました。その表紙にそよ風分教室のURL http://**** が印刷されています。面談している教室にインターネットにつながる端末があれば、すぐその場でアクセスしてみるんじゃないでしょうか。

お母さんが言います。「院内学級の先生が、『転校しても大丈夫ですよ。地元の学校とインターネットで交流できますから。担任の先生に伝えて下さい』って...soyokaze@***これがEメールアドレスだそうです。」

病院にお見舞いに行くことを考える。当然でしょう。でも、地元からは遠く、すぐには無理かもしれません。あなたがEメールを送る環境を持っているなら、とにかく入院している教え子にメールを送ろうと思うでしょう。

「〇〇さん、体の調子はどうですか？治療はつらいでしょうね。早く元気になって、退院できるよう祈っています。学校にもどって来るのを、クラスのみんなで待っています。がんばれ！土曜日にはお見舞いにいきますね」

分教室では受信したメールをプリントアウトして、病室の子どもの元に届けます。「担任の先生からメールが来たよ！はい、これ」

受け取った子どもの顔がパッと明るく輝きます。...大好きな先生からのお見舞いメールは、どんな高価な薬よりも効き目があるようです。そういう瞬間に、私は何度も立ち会いました。

3 「言葉」を変える

べてるの家 の 理念 あれこれ

- ・「人」と「こと(問題)」をわけ
- ・弱さの情報公開をすると、「人の経験」が集まってきます
- ・仲間がそばにいてだけで 自分も光かがやく
- ・人を受け入れられるかどうか は 自分を受け入れられているか が 鍵になります
- ・前向きな自分の助け方をさがそう
- ・「見つめる」から「眺める」へ
- ・リカバリー is ディスカバリー 回復とは発見である
- ・他者を助けることを通じて 自らを助ける

「人間には生きていく上でいろんな苦勞があるよね、どの苦勞を選ぶ？
そのセンスを重視するのです」

2015 年 4 月 17 日朝日新聞「折々のことば」（向谷地生良）

～ 当事者研究とは 一当事者研究の理念と構成一 ～

向谷地生良（北海道医療大学、浦河べてるの家）

● 当事者研究とは

「当事者研究」は、北海道浦河町における「べてるの家」をはじめとする起業をベースとした統合失調症などがかかえた当事者活動や暮らしの中から生まれ育ってきたエンパワメント・アプローチであり、当事者の生活経験の蓄積から生まれた自助－自分を助け、励まし、活かす－と自治（自己治療・自己統治）のツールである。当事者研究では、当事者がかかえる固有の生きづらさ－見極めや対処が難しいさまざまな圧迫感（幻覚や妄想を含む）、不快なできごとや感覚（臭いや味、まわりの発する音や声など）、その他の身体の不調や症状、薬との付き合い方などの他、家族・仲間・職場における人間関係にかかわる苦勞、日常生活とかかわりの深い制度やサービスの活用レベルまで、そこから生じるジレンマや葛藤を、自分の”大切な苦勞”と捉えるところに特徴がある。そして、その中から生きやすさに向けた「研究テーマ」を見出し、その出来事や経験の背景にある前向きな意味や可能性、パターン等を見極め、仲間や関係者の経験も取り入れながら、自分らしいユニークな発想で、その人に合った“自助－自分の助け方”や理解を創造していくプロセスを重んじる。

http://toukennet.jp/?page_id=2

NO20. まず・とにかくあいさつ法

： 柳 一茂

1. 苦勞の場面

家の前を通る学生や近所の人たちの会話が「デブ」「バカ」など自分への悪口に聞こえ、引越しを繰り返していた。場所を変えても同じことが起きた。

2. 自己対処（スキル）

受け身でいないで、自分の方から近所の人にあいさつしてみた。すると相手も「こんにちは」と応えてくれた。

3. 効果

「ここに僕が住んでいますよ」「自分はここに居てもいいんだ」という気持ちになってうれしかった。また、挨拶することで一日を爽やかな気分で過ごせる手ごたえを感じ、ここに住み続けるぞという決意も持てるようになった。人間関係においても受け身でいるのではなく、自分から話しかけたり、発信することが大事だと思うようになった。

http://toukennet.jp/?page_id=370「当事者研究ネットワーク」当事者研究「スキルバンク」

*ここで言うスキルとは、苦勞や問題が起きたときに自分でできる自己対処（自分の助け方）の方法を指します。当事者研究の中で生まれたスキルを紹介します。

検索キーワード：べてるネット べてるの家 当事者研究